



Title	1990年代以降の日本におけるゲイ男性のアイデンティティ形成：自己変革／社会変革活動における表象の戦略的利用 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	斉藤, 巧弥
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13979号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78340
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takuya_Saito_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：齊藤 巧弥

学位論文題名

1990年代以降の日本におけるゲイ男性のアイデンティティ形成

—自己変革／社会変革活動における表象の戦略的利用—

本研究では、日本においてゲイ男性当事者による社会的活動が活発になった1990年代以降に着目し、その自己変革／社会変革活動の中でいかなるゲイ男性の表象が提示され、いかなる社会的アイデンティティが形成されてきたのかを論じる。

まず序論において、1990年代という時代の意味を示す。それまで被抑圧者・客体として捉えられていたゲイ男性が主体として社会への働きかけを始めたのがこの時代である。当事者による様々な活動が見られ、マスメディアにおいても「ゲイ」についての言説が増加した。また、同性愛についての学術的な研究もこの時期に始まり、ゲイスタディーズなどの議論によってゲイ男性の政治的アイデンティティの形成が目指された。しかし、同時期に海外よりもたらされたクィア・スタディーズが、アイデンティティの否定として受容されたことにより、アイデンティティについて論じること自体が批判の対象となっていく。そうした潮流の中で見落とされてきた、そもそも人はアイデンティティを模索してしまうということ、そして実際に「ゲイであることを巡る」活動が展開されてきた事実を本研究では掘り起こしていく。その際、クィアの指摘も参考に、1990年代以降のゲイ男性のアイデンティティ形成の中で何が・誰が周縁化されていったのかにも着目する。

本研究ではゴフマンを参考にして、アイデンティティを「オーディエンスが誰であるかによって使い分けられる自己提示」として捉える。また、ゲイ男性の運動は、社会運動論で言うところの「新しい社会運動」に区分されるため、その特徴である「自己変革活動」と「社会変革活動」に注目する。この2つの視点を統合し、「ゲイ男性をターゲットに行われる自己変革活動」と「社会をターゲットに行われる社会変革活動」を分析の軸とし、具体的な分析事例としてそれぞれに該当する事象を四つ選んだ。自己変革活動としてのゲイ雑誌誌上で展開される言説、自己変革活動及び社会変革活動としてのゲイマンガで描かれるストーリー、社会変革活動としての意味合いの強いゲイリベレーション団体の活動、そして対社会の側面が最も強いセクシュアルマイノリティのパレードの戦略である。

第1章「ゲイ雑誌『バディ』と「ゲイライフ」—「ゲイ」としての自己肯定と生き方の形成」では、1990年代に創刊された新しいタイプのゲイ雑誌『バディ』を取り上げ、編集者が「ゲイ」であること・「ゲイ」として生きること、すなわちゲイライフについていかなる言説を形成していたのかを分析する。創刊当初は「普通」であることを否定する姿勢として「ゲイ」や「ゲイライフ」という言葉を用いていたのが、やがてハッピーで充実した生活を送る主体としてゲイ男性を描くことで読者に自己肯定を促す方向に変化していく。また、同性愛者にとって制度的な結婚がまだ現実的ではない日本社会において、生涯独身で生きていく不安と、年齢を重ねるにつれゲイ・コミュニティ内での「モテ」を失っていくという不安を解消する指針として、

「男」というジェンダーを基盤とした経済的自立や安定をモデルとして示していくことになる。『バディ』による「ゲイライフ」という概念の形成は多くの読者に自己肯定感を与えていったと同時に、社会規範と折り合いをつけながら「男」としてのマジョリティ性を維持する存在としてゲイ男性を位置付けることにつながったと考えられる。

第2章「ゲイマンガに描かれるゲイの物語—変化する悩みとその提示／対処／回避」ではゲイ男性によって当事者向けに描かれたマンガと一般向けに描かれたマンガを取り上げ、フィクションとしてのマンガがゲイ男性の悩みや現実をどう扱ってきたのかを分析する。1990年代までの当事者向けのマンガでは、異性愛社会からの抑圧に起因する葛藤が描かれていたのに対し、2000年代以降の物語では異性愛社会は背景に追いやられ、ゲイ・コミュニティ内で展開される恋愛の悩みに焦点が当てられるようになる。一方で、一般向けのマンガが扱うのは、ゲイ男性が社会で経験する差別であり、そこでは被差別者として悩むゲイ男性像が描かれている。このように当事者向けと一般向けのゲイマンガのテーマを比較すると、差別に「悩むゲイ」という従来のテーマとは異なる、オルタナティブな物語が当事者に対しては提示されるようになっていくことが際立つ。第1章の『バディ』でゲイライフの内実が規範への抵抗から同化へと変わっていったように、当事者向けゲイマンガの表象も、社会におけるマイノリティとしての立場への対峙を回避するような方向へ変化していることが分かる。

第3章「「ゲイリブ」による社会運動とコミュニティ形成—「札幌ミーティング」による活動を事例に」では、非当事者をターゲットとして社会変革を試みるゲイリブ団体、札幌ミーティングの活動を分析する。札幌ミーティングのメンバー間では、性的なイメージと結び付けられる「ホモ」に対し、政治的な主体性を持った「ゲイ」アイデンティティが作られていった。また、社会に対して差別に悩み抗議するゲイの姿を示す一方で、メンバー外のゲイ男性をゲイリブに動員するために真面目な活動とは対照的な「遊び」を企画することでハッピーなゲイの姿を提示していった。

第4章「セクシュアルマイノリティのパレードにおける演出—連帯におけるアイデンティティとパレードの中のゲイ男性」では、さらに非当事者に対する社会変革活動としての性格が強い活動としてセクシュアルマイノリティのパレードに焦点を当てる。パレードはゲイ男性に限らず広くセクシュアルマイノリティの社会活動の場であるため、そうした連帯の中でのゲイ男性の位置づけにも着目した。1990年代のパレードの〈差別を止めよ〉という抗議／要求型のスタイルは、2000年代に入ると〈私たちはここにいます〉という穏やかな存在主張／可視化型のスタイルへと変わってきた。政治的であると同時に一種の祭りとしての性質も併せ持つパレードにおいても、より多くのゲイ男性を動員し、社会に対し存在を主張するためにドラッグクイーンのような分かりやすい差異としてのパフォーマーを中心とした「楽しさ」を前面に出した演出が戦略として取られている。

4つの活動事例の分析を受け、第5章にて総括的な議論を行う。各活動において、ゲイ男性が自己変革を達成することにより社会変革活動へと向かっていくことが期待され、「ハッピーなゲイ」の表象はそうした思惑によるものでもあったが、実際には必ずしもそのような結果にはなっていない。その重要な一因として、前提とされる自己変革の中でも特に恋愛や性的出会いの充足がゲイ男性に特有の問題であったことが指摘される。現代のゲイ男性の多くが抱える悩みや関心の中心はゲイ・コミュニティ内で展開される人間関係にあり、社会変革活動が解決を目指す悩みとは大きなずれが生じていると考えられる。ゲイライフの獲得により、異性との結婚という社会規範から距離を置くことができるようになり、また男性性というマジョリティ性を巧みに利用することも可能なゲイ男性は、必ずしも社会変革を求める方向には向かわない。1990年代から取り組まれてきた「ゲイ」というアイデンティティの形成とそれをもとにした活動は既に限界を見せ始めていることが示唆される。